

山梨県総合計画審議会第2回教育文化部会 会議録

1 日 時 平成21年6月5日(金) 午後2時30分～4時30分

2 場 所 ベルクラシック甲府「コンチェルト」

3 出席者

・ 委 員 (50音順、敬称略)

飯窪 さかえ	池田 政子	石田 敏枝	窪内 節子	三枝 康治
佐野 好子	田村 悟	鶴田 一杏	鳥海 順子	長谷川 義高
深沢 修	深澤 光江	保坂 精治	保坂 智子	山田 紀彦

・ 県 側

知事政策局長 県民室長 教育長
(事務局：知事政策局) 政策参事 政策主幹

4 傍聴者等の数 2人

5 会議次第

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) 知事政策局長あいさつ
- (4) 議事
- (5) 閉会

6 会議に付した議題 (すべて公開)

- (1) チャレンジミッション'09について
- (2) 平成20年度県民意識調査の結果について
- (3) チャレンジ山梨行動計画の中間見直しについて
- (4) その他

7 議事の概要

(1) 議題(1)～(3)について

議題(1)に関し、資料1により各部局長等から担当事務に係る「はぐくむ・やまなし」の7事業について説明、議題(2)及び(3)に関し、資料2、3により事務局から説明した後、次のとおり意見交換を行った。

(委員)

県立文学館が、指定管理者になって、来館者から好評であるという説明があったが、内容を教えてもらいたい。

(教育長)

「好評」を数値化することはできないが、例えば、「太宰治展生誕 100 周年」記念のオープニング・セレモニーから、来館者の視点をベースにいろいろ改善してきた。また、20 周年を記念しての企画でも、期待ができるような提案を指定管理者からもらっている。

具体的なサービスの例では、付属施設の活用ということになる。今までは、展示してあるものを、ただ観るということだけだが、世界の美術館や博物館にもあるように、文学館の中の喫茶室や芸術の森公園を活用し、そこでちょっとお茶を飲みながら文学に親しむといった部分もある。

(委員)

来館者に対して、必ず一言書いてもらうようなアンケートをしたとか、具体的に好評だったということではないのか。

(教育長)

アンケート調査等による客観的な数値に基づいていないのは残念だが、今後は、もう少し具体的に数値で示すことのできるようなものも考えたい。

(委員)

必ずしも数字ということではなくてもいいと思うが、例えば、来館者が、スタッフに口頭で伝えたことなども記録として残しておいたほうが評価の材料となるのではないか。

(委員)

いじめ・不登校対策の推進について、スクールカウンセラーの活用、あるいはスクールソーシャルワーカー、不登校生徒対策の加配等、充実した配置に感謝する。

不登校生徒対応加配ということで、不登校を専門に担当する教員を 32 名から 42 名に 10 名増にするということだが、不登校を専門に担当する教員というのは、どういう方が担当しているのか。

(教育長)

大学等で臨床心理等を専門に勉強した者とは限らない。中学段階で一番子どもたちが求めているのは、子どもたちの話を十分に聞いてやれる人材である。

私たちの育ってきた成育歴および境遇ではとても推し量れないほど、大変な境遇を背負った子どもたちが大勢いる。今後も可能ならば、もっと多くの人材を配置できればと思っている。

(委員)

先日の新聞にも載っていたが、知的障害の子どもが、なぜか原因がはっきり分からないが、増加傾向にある。

自然についても、子どもの頃の自然と今の自然、一見すると同じようだが、川を見れば川には何もいない。昔はいろいろなものがいた。一見すると変わってない様でも、私たちの周りは、かなり変わった。

医療も、かなり変わった。子どもを産みたくても産めないような環境。

かつては、派出所がいっぱいあった。今残っているのは一つだけ。誰かに襲われて交番に飛び込んでも、電話しかない。

何が言いたいかと言うと、今は世の中いろいろなものが変わっている。やはり、本当の幸せというものを考えたときに物ではないと思う。

(委員)

山林に恵まれ、空気もきれいな環境にいる中で、教育的な見地から考えると、森林を大事にするような、心を育むというか、教育の観点にそういうものを植えつけていく必要がある。

市町村合併により、市町村の行政サービスが随分と変わってきた。広域になればなるほど、県民のニーズに対応でききれない部分が出てきている。

特に、福祉のきめ細かさが欠けているとか、通学を考えると、過疎地になった所で教育の問題があるから中央に通う、不便じゃない所に居住をしようと考え、自然に過疎化が進行していく。その中で、特に自然教育をしたいというときに、過疎地では人材がみんな高齢化している。

28 市町村と県の教育行政が連携をとり、人材の数を増やし、体制を整備していくことを教育の重点に置く必要がある。いろんな面で人間教育の中でバランスが崩れていくような感じがする。チャレンジ山梨行動計画の見直しの基本の中に、教育を原点に据えて欲しい。

どんな行政施策を行うにしても、原点は教育である。教育を大事に思いながら、今の経済状況の中では、特に生活者視点で、施策の見直しを行って欲しい。

(委員)

先ほど少子化に伴って県内の高等学校でも生徒数が減少しているという話があったが、一方で特別支援学校は、生徒数が増加している。

小・中学校で教育を受けてきた発達障害、あるいは健忘を持っている生徒達の受け皿として、高等学校での対応を検討する時期に来ている。

例えば、通級指導教室を高等学校にも設置するとか、高等支援学校の分校のような形で高等学校に設置するとか、そういう通常の教育も受けられる場を検討してもらいたい。

(委員)

事務局の進め方として、先に県民意識調査を説明してもらい、その実態を踏まえて、チャレンジミッション'09 がこうであるという説明の方が理解しやすかった。要するにデータと施策がリンクできるような説明があると、もっと分かりやすい。

新県立図書館の整備構想が、県民にとっても、私たち学校の現場にとっても、今後どうなっていくのか、一番分かりづらい。

新県立図書館と既存の図書館とは、どこがどう違って、どのように新しいカラーを出していくのか、山梨県の学習拠点として何を打ち出していくのか、生涯学習の拠点として何を打ち出していくのか、そういうものが明確にされると、県民としては非常に分かり易くなる。

(教育長)

教育について、いくつか意見があった。

まず自然との関連で申し上げる。よく聞く言葉だが、「1年先なら種をまき、10年先なら木、100年先なら人を育てる」。学校だけではできない部分が沢山ある。今年度、「学校応援団」は、大きな枠組みの中で、例えば婦人会の活動であるとか、育成会、安協まで含めて、いろいろ組織的に協力してもらいながら実施している。

少子化で、本当に驚くような勢いで全体的に子どもの数が減っている中で、特別な支援を要する子どもたちの数は増えている。将来どんな数字になるのかという試算に基づいて、様々な検討をしている。小・中学校に特別支援学級ができて、子どもたちが救われている状況を目の当たりにしている。ただ、その子どもたちが高校に行った時は、大変難しいものがある。山梨県以外の都府県の、いろいろな例を見ても、成功している例、失敗している例がある。新たな課題を生んでいる部分をいろいろと検討していきたい。

新しい県立図書館については、限られた教育予算の中で、常に最大限ということ意識している。いろいろとスケジュールが急がれているところであるが、中身については、最大限、公表を行っている。ただ、設計とかデザインとか、いろいろな意見が分かれる。生命線である機能であるが、蔵書の在り方、図書館の在り方等について検討を重ねている。その中で、さらにユニバーサル・デザインという視点も充分考え、甲府駅北口周辺の文化的なエリアとして、新県立図書館は重要な位置にあるので、そうしたことを考慮しながら進めている。

(委員)

学校教育の中で教職員の資質、指導力の向上ということは、非常に大事であり、大変急務なこと。山梨大学も教職大学院をつくった。山梨英和大学も臨床心理士の養成第1種校。教員の身分のまま大学院で勉強するということができるようになってきている。

ただ、そこで問題になることは、内地留学という制度が1年間と限られているということ。山梨英和大学では、大学院は一応、2年間が修了ベース。内地留学が1年間だけでは卒業できない。

そこで、柔軟に、2年目に関しては、例えば午前中に学校で授業をして、午後は大学に行くとか、英和大学では来年、社会人のために長期学習制度というものを導入する。それは3年間で大学院を卒業したいというニーズに基づき、2年間の学費を3年で割り、3年間修学するという制度。

いろいろな形で、教職員の再教育ができるような環境をぜひとも揃えてもらいたい。

(教育長)

教職員の資質向上に関しては、いろいろと計画、実施している。例えば、現場にいる校長、教頭の視点から教育を見ることがあるが、違う視点では、自分の子どもをどういう先生に教えてもらいたいのか、また、どういう学校に行かせたいのかという視点がある。知識、情報をたくさん持った教員よりも、ある意味で、児童・生徒と

心を通わすことができる教員、そういう意味での研修をやっていければと思う。

頂戴した意見は重要であり、可能な限り長期にということを考えるが、研修させて伸ばしたい教師と、いわゆる学校の構造材として、学校にいて生徒を見てもらいたい教師が往々にして重複するところがある。こうしたことから、十分に独り立ちができる教師と、もうひと頑張りで構造材になれる教師を育てていきたいと思っている。教職大学院の新しいシステムも、リーダーシップのとれる学校の構造材となれるような教師を育てるということで、大いに期待をしている。

(委員)

教員免許制の更新については、現実問題として現場の先生方にとっては講習等で結構大変である。

今年度、新たに入ってきた生徒の家庭をみると、入学金や授業料等などが払えない家庭が増えており、経済的な支援は必要。

環境・資源・エネルギーについて、児童・生徒たちは、これから社会人になり、山梨県の中心になっていかなければならない方々であり、環境の視点が、しっかりと前面に打ち出せるような、そんな施策をお願いしたい。

それから新型インフルエンザが流行っているが、防疫対策をチャレンジ山梨行動計画の新たな見直しの中で考慮してほしい。

(教育長)

学びたい気持ちがあるのに親が仕事を失ったとか、経済的な事情で学習を継続することができないというのは、何としてでも助けてやりたい。様々な奨学金制度や授業料の減免措置がある。一定の基準を超えれば誰でも減免措置を受けられる。それぞれの学校において、漏れなく子どもたちをその制度で拾い上げられるように、さらに周知をしていきたい。

また、環境・資源・エネルギーについては、公立の小中学校においては、光熱費の前年度同時比較を実施している学校もある。

三つ目のインフルエンザ対策については、教育委員会も、いろいろ意見をもらっている。この大きなマイナスの出来事からプラス面を考えると、子どもたちの心の中に安全と衛生に関する意識、うがいとか手洗いの励行を習慣化することができた。まだ全面的に収束したわけではないので、引き続き安全・衛生の各ポイントについて、各方面から協力を得たい。

(委員)

ハード的には整備されてきているが、ソフト的には、県民のスポーツの普及という意味で、まだまだ広がりという点で少ない。総合スポーツの企画や計画は、各地域で頑張って進めている。そういうところを大いに支援をしてもらい、本当の意味で、今後のスポーツ振興、愛好者を増やしてもらえようをお願いしたい。

(教育長)

施設設備で補うことが必要なところは推進しており、今は、ソフト的な体制づくりが重要である。このため、スポーツ健康課を中心に総合型のスポーツということで、

いろいろな計画をしている。

先ほどから話が出ている少子化により、どういうことが起きるかと言うと、それぞれの学校の児童・生徒数が減る。そうすると実質的に部活の種目数が一気に減ってしまうということが起こる。

スポーツでは、チーム・スポーツが多いことから、例えば、野球部とバレーボール部をつくったら、もう他の部をつくることができないという規模の学校ばかりになってきているということが大きな問題である。一方で、競技スポーツとして、他の都府県に対抗し、勝つというのも一つの目標になる。

もう一つ大切な姿勢としては、山梨県民みんなが健康で、できるだけ長生きできるよう、何でもいいから 1 人 1 スポーツをするということ。市町村でもそういったスローガンを掲げているんな施策をやっている。もちろん学校では、きっかけとなるような指導をいろいろ考えているが、地域でも取り組んでいただければありがたい。子どもだけではなく、みんなが健康でいられることが一番幸せである。

(委員)

先ほど環境教育の問題があったが、ぜひ山梨で行ってもらいたい。自然豊かな山梨にとって、これを生かしたい。環境教育というのは、教育とか文化だけではできない問題。山梨に一番望むのは情操教育。美術教育が少なくなり、不満であるが、実は、環境教育により十分それができる。美術は、絵を描くとか、彫刻をするとか、そういうことをやらなくても環境の中で子どもが非常に感動する部分がある。そういう感動する部分を環境教育と上手く結び付けて行えば、情操教育になる。

そういうことをやるには、産業とか地域とかの横のつながりが大切。審議会の部会にも環境部会というのがあるが、そちらの意見を聞いたり、いろいろすべきである。

(教育長)

県の施策として、小中学校エコ活動推進事業というものを実施しているところ。

子どもたちに自然の良さに触れさせるということを実施している。

具体的には、県産材を腰壁に使用し、わざとヒノキの木目が出るようにし、匂いが子どもたちに伝わるように造ったりするなど、いろんな場面で自然の大切さを伝えられればいい。

(2) その他

事務局から今後の審議日程について説明し、了承を得た。